

監督と出演者、それぞれの視点

——『YOUNG YAKUZA』仏公開当時の新聞記事より

ドキュメンタリーにおいて監督と出演者はどんな関係にあるのだろうか？ しかも相手がヤクザとすれば？ 今回、審査員作品として上映される『YOUNG YAKUZA』は、両者のあいだに共感とも観察とも異なる距離感を保っている。本稿では、この作品が2008年にフランスで公開された際の複数の新聞記事から、ジャン＝ピエール・リモザン監督と、出演者である熊谷正敏氏の語った言葉をそれぞれ抜粋、紹介する。(以下、Kは熊谷氏、Lはリモザン監督の言葉)

K: 自分がヤクザになるとはね、夢にも思っていませんでしたよ。(…) 刑務所に1年、18歳で娑婆へ出たとき拾われたわけです。(…) 5年間若衆の下っ端にしましてね、床みがきやらオヤジの冷蔵庫の管理やらを、みんな抜かりなくやるようにした。それからですよ、自分が出世の道を歩き始めたのは。^[1]

L: 私はこの作品を、あるひとりの若い男が悪への道を歩み出す姿を追う、そうした見習い期間についての映画ととらえていました。一方で熊谷氏は、組織のヒエラルキーの中で政治的な影響力を強める際の名刺代わりとなるようなものを望んでいたようです。だから彼は自己演出をする。例えば、はじめのほうで彼の声は、なにかが奥に詰まっているような、しゃがれたものとなっています。『ゴッドファーザー』のマーロン・ブランドを真似ているんですね。他のヤクザの人々もそうでしょうが、彼もこの映画を何十回となく観ているに違いありません。^[2]

K: 私の興味——それは何か。やはりね、現実というものを見せねばならぬのですよ。規律や礼儀、さまざまな決まりごとが世の中にはある。家族を重んじるということも、我々が示さなければならぬ。我々に対する評価にしてもね、やはり多大なる誤りがありますよ。映画の影響でしょうがね、『ゴッドファーザー』みたいな。^[1]

L: 私の興味は、映画のイメージがとり憑いてあまり見通

しのよくないこの世界から、映画が逆に何を引き出しうるのかを確かめることにありました。ヤクザの人々は、自身の存在を正当化するのに、自ら作り上げた神話的な役柄を演じているのです。犯罪組織でありながら、彼らはかつて1000本以上の映画の製作にかかわっていました。そこでヤクザを演じている俳優の大半は、かつてその筋にいた者たちです。こうした男たちは伝説によって自らの役に仕立てあげられ、絶えず演技をしているのです。^[3]

K: 我々のいる組織については、お話しすることはありませんね。(…) 我々の活動範囲も年々厳しく制限されるようになっていきます。暴対法が1991年にできて、組織のできることは切り詰められた。我々にもかつてのような力や勢いはありません。しかし私は望みを捨てていませんよ。ヤクザの領分、本分が、法律をねじまげることにあるとは必ずしも言えないのではないかと、そう思いますね。^[1]

L: 私は熊谷氏と取り決めを交わし、非合法的な活動を撮影することもなし、それについて詮索もしない、ということにしました。私にとって、犯罪に目を瞑るということが問題となっていなかったのは明らかです。私が考えていたのは、ここに映る人物やその身体、情動が変貌するさまを捉えることでした。仮面が剥がれ落ち、彼らの住まう幻想が全て取り除かれることで、その奥にあるより人間らしい、より脆い部分が露わとなる。この映画は、熊谷氏の思惑に加担するというよりもむしろ、斜陽に向かうひとつの世界、至る所に罅が入り、そのイメージも棄損された世界の姿を描いているのです。^[3]

K: 私はカトリックの信者です。二度と刑務所に入ることがありませんようにと、いつでも祈りを捧げています。それがゲームの規則であるとは承知していますが、とはいえ死を恐れることはありません。(死が訪れた際には) 神は私をお許しになられるでしょう。^[1] (中村真人訳)

出典

[1] « Fantasmies et réalité de la mafia japonaise » par Emmanuèle Frois, le 9 avril 2008, *Le Figaro*.

[2] « "Yakuza," parrain désemparé » par Bruno Icher, le 9 avril 2008, *Libération*.

[3] « En filmant les yakuzas, il ne s'agit pas de fermer les yeux sur leurs crimes » par Jean-Luc Douin, le 9 avril 2008, *Le Monde*.